

平成22年度 指定試験事業課題事後評価結果

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒地中北部向け、早生、高度耐冷性、良食味及び直播栽培適性の水稲品種の育成	(地独)道総研 上川農業試験場	A	A	A	B	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当初の目標に沿って品種育成は進んだ。今後の普及も期待できる。</li> <li>・育成した新品種の普及に努めている。しかし、これらの品種のいもち病抵抗性は現在普及している品種よりも劣る。いもち病は予期しない大被害をもたらすことがあり、育成品種には抵抗性を付与することを望む。次世代の後継系統には抵抗性の強いものもあり、今後の成果が期待できる。</li> <li>・新規育種素材の発掘とDNAマーカー利用による形質選抜への取り組みは高く評価できる。</li> </ul>
寒冷地北部及び中山間地向け、高度耐冷性、良食味品種及び直播適性の水稲品種の育成	(地独)青森県産業 技術センター農林 総合研究所藤坂 稲作部	A	A	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今期の育成品種は、食用に育成していた系統を飼料用に転じた「みなゆたか」のみであった。しかし、近い将来に品種化が期待できる優良系統も育成している。</li> <li>・本来の主な目標である耐冷性、耐病性、高品質、良食味を備えた優良系統の育成を加速するよう望む。</li> <li>・よりインパクトが大きな品種の開発をめざしてほしい。</li> <li>・DNAマーカー利用選抜や量的形質の遺伝解析に基づく成果を活用して、今後の稲育種を担う研究や技術開発にも取り組んでほしい。</li> </ul>
寒冷地北部及び中山間地向け、高度耐冷性、良食味品種及び直播適性の水稲品種の育成	宮城県古川農 業試験場	A	A	A	B	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育成品種に加え、近い将来に品種化が期待される優良系統もすでに保有している。育成品種・系統は近隣県への普及にも努めてほしい。</li> <li>・新規の遺伝資源や育種素材の利用、DNAマーカー利用による選抜手法の適用に取り組んできたことが、新品種の育成に結び付いている。</li> <li>・いもち病抵抗性強化の方策としての「同質遺伝子系統利用の意義・効果」について、もう少し明確な見通し・判断が必要である。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒冷地南部向け、極良食味、高品質及び多収の水稻品種の育成	福井県農業試験場	A	A	A	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新たに育成された3品種は耐病性、品質などの形質について現行品種を凌駕していないが、特定地域への普及が期待できる。保有している後継の優良系統の品種化を加速することを望む。担当地域の全県が水稻育種を実施している現状からみて、地域の連携を強化した育種体制を構想することは重要である。</li> <li>・近年育成した材料の中にはいもち病抵抗性を備えている系統もあるが、今後、新規遺伝子を利用したいもち病抵抗性の強化が課題である。</li> <li>・寒冷地南部は水田率が高く、当該地域における米生産の重要度は今後とも高い。「地球温暖化」が予測される中で、高温登熟性等の新たな育種目標の設定も必要になっている。今後とも当該試験地からの研究の成果に期待したい。</li> </ul>
温暖地・暖地中山間地向け、いもち病抵抗性、良食味の水稻品種、糯、酒米品種の育成	愛知県農業総合試験山間農業研究所	A	A	A	A	A	A	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地の利を活用して、いもち病抵抗性に関する基礎研究と育種における成果をあげた。</li> <li>・高度いもち病圃場抵抗性を導入できたことは、長年の基礎研究の成果とみられ、基礎研究の重要性を改めて認識させる好例である。</li> <li>・育成した新品種の普及はこれからである。また、品種化が期待できる優良系統もすでに保有している。普及に当たって、担当地域へ広く浸透を図ることが望まれる。</li> <li>・圃場抵抗性は病原菌のレース分化により崩壊するのか、あるいは維持し続けるのかは非常に重要な課題であるので、稲の抵抗性の安定性を明らかにしてほしい。</li> </ul>
暖地の普通期栽培向け、極良食味、多収の水稻品種の育成	宮崎県総合農業試験場	A	B	A	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登熟期の高温耐性の強化については成果があがっているが、白葉枯病抵抗性等、病虫害抵抗性の強化が必要である。</li> <li>・保有する優良系統の品種化を加速するよう望む。トビイロウンカ抵抗性の育種は担当地域にとって重要である。その可能性と限界を明らかにしてほしい。</li> <li>・新しい育種技術への取り組みが遅れている。</li> <li>・地球温暖化が予測される中で、高温登熟性に加えて、高温不稔も顕在化する可能性が高い。その問題の解決にも取り組まれない。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
温暖地及び暖地の早期栽培向け、高温耐性、耐穂発芽性、良食味、多収の水稻品種の育成	鹿児島県農業試験場	A	B	B	C	B	B	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登熟期の高温・低日射に対する耐性は、他の地域よりも担当地域の品種が備えるべき重要特性となっている。耐性検定法がすでに確立され、優良系統も育成されてきたが、それらの品種化には至っていない。</li> <li>・近年の形質選抜技術として有効なDNAマーカー利用が全く行われていないように見受けられる。</li> <li>・研究成果の公表が不十分である。</li> <li>・温暖地及び暖地稲作のもう一つの重要問題である「紋枯病抵抗性」についても、その成果に期待したい。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒地向け、秋播き、高品質、めん用、安定多収の小麦品種の育成および寒地向け、春播き、高品質、パン用、安定多収の小麦品種の育成	(地独)道総研北見農業試験場	A	A	A	A	A	A	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ホクシン」の後継品種として、多収で、穂発芽耐性、赤かび病抵抗性が改良され、ASW並の製麺適性をもち、製粉性に優れる秋播き小麦の「きたほなみ」を育成したことは評価できる。</li> <li>・パン用の「はるきらり」の作付面積も拡大しつつあることも評価できる。</li> <li>・今後は、穂発芽耐性が強く、雪腐病抵抗性を一層改善した品種の育成に期待する。</li> </ul>
寒冷地南部および温暖地北部向け、早生、耐寒性、高品質、めん用の小麦品種の育成	長野県農業試験場	A	A	A	B	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耐病性が強化された製パン用硬質小麦の「ゆめかおり」を育成し、長野県、栃木県、茨城県で、奨励品種に採用されたことは評価できる。</li> <li>・めん用の有望な系統が育成されており、将来の品種化が期待できる。</li> <li>・育成品種の普及にもさらに力を入れてほしい。</li> </ul>
温暖地東部の二毛作地帯向け、早生、高品質、諸病害抵抗性の小麦品種の育成	群馬県農業技術センター	A	A	B	A	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北関東を中心に、「農林61号」に代替して広域普及すると期待されている「さとのそら」を育成したことは評価できる。</li> <li>・本品種の普及に努める過程で、生産者および実需者のこの品種に対する評価を傾聴し、今後の品種育成に役立ててほしい。</li> </ul>
温暖地西部の多湿水田輪換畑向け、早生、良質の小麦品種の育成	愛知県農業総合試験場	A	A	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耐湿性に優れ強稈性で多収の「東海103号」を育成したことは評価できる。</li> <li>・耐湿性検定圃場を整備して耐湿性に優れた系統を選抜・育成する一方、耐湿性に関して大学との共同研究を実施してその成果を公表していることは評価できる。</li> <li>・次世代めん用品種の育成では、赤かび病やうどんこ病などの耐病性の一層の強化に期待する。</li> </ul>
温暖地向け、縞萎縮病抵抗性、凍霜害抵抗性、極高品質のビール用二条大麦品種の育成	栃木県農業試験場栃木分場	A	A	A	B	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「スカイゴールデン」において問題となったタンパク質の過剰分解を解消するために、低タンパクでビール醸造特性が優れる「関東二条42号」を育成したことは評価できる。</li> <li>・縞萎縮病、うどんこ病の複合抵抗性素材が着実に育成されている。</li> <li>・新型の大麦萎縮病に対する抵抗性育種への取組に期待する。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
ビール醸造用品質の検定、 評価法開発及びビール醸 造用極高品質中間母本の 育成	栃木県農業試験 場栃木分場	A	A	A	B	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビール業界と共同で行う比較試験において公的機関を代表して品質分析を担当しており、その中から「しゅんれい」や「サチホゴールド」が誕生していることから、その貢献は極めて大きい。</li> <li>・ビール醸造用品質の評価法開発、高品質母本の育成(LOX欠損、極低ポリフェノール、<math>\beta</math>-グルカン欠失など)、ならびに品質特性や耐病性関連のDNAマーカーを開発しており、今後のビール用二条大麦育種に大いに貢献する重要な成果を挙げている。</li> </ul> <p>ビール麦の品質検定・評価法は世界のトップ水準にあると考えられるため、英文での論文作成を望む。</p>
暖地向け、病害複合抵抗 性、耐湿性、極高品質の ビール用二条大麦品種の 育成	福岡県農業総合 試験場	A	A	A	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新品種は育成されなかったが、品種化が期待される「九州二条20号」などの優良系統を育成している。</li> <li>・側面裂皮粒や凸腹粒発生率に関するQTL解析を進め、実用可能なDNAマーカーを開発したことは評価できる。</li> <li>・新型大麦縞萎縮ウイルスに対する抵抗性育種法について、栃木県農試との連携を望む。</li> </ul>
寒冷地南部及び温暖地北 部向け、早生、耐寒性、高 品質の食用六条大麦品種 の育成	長野県農事試	A	A	A	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・品種化には至っていないが、異なる地域や用途に対応する系統選抜が実施され、優良系統が育成されている。</li> <li>・焦点を絞った育種計画のもとに、他機関との連携によって耐寒性、耐雪性、耐湿性、耐病性を強化する必要がある。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒地北東部向け、病害・線虫抵抗性、でん粉及び加工食品原料用のばれいしょ品種の育成	(地独)道総研北見農業試験場	A	A	A	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・でん粉原料用、加工食品用の新品種と油加工用の有望系統を育成しており、ほぼ目標を達成している点は評価できる。</li> <li>・シストセンチュウ抵抗性およびYウイルス抵抗性の耐病性付与に関して、DNAマーカーの開発が進み、効率化が達成されてきたことは評価できる。</li> <li>・複数病害抵抗性を持ち、収量性・品質などが改良された品種の育成を期待する。</li> </ul>
温暖地・暖地向け、病害・線虫抵抗性、高品質、多収のばれいしょ品種の育成	長崎県農林技術開発センター	A	A	A	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の病害虫に抵抗性を持ち、かつ多収で外観形質の良い「さんじゅう丸」を育成した点は評価できる。</li> <li>・保有する系統の品種化を進める一方、それらの系統を基礎に、収量性や品質面で既存品種を上回る実用品種の育成を期待する。</li> <li>・高機能性品種の開発も重要であるが、需要を見極め、試験の重点化も必要である。</li> </ul>
寒地北東部向け、耐冷性、線虫抵抗性、機械化適性、高品質、多収の大豆品種の育成	(地独)道総研十勝農業試験場	A	A	A	B	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・十勝地方の基幹品種であるユキホマレにシストセンチュウ高度抵抗性を付与した「ユキホマレR」を育成した点は評価できる。</li> <li>・「ユキホマレR」の普及に当たっては、シストセンチュウのレース変化の監視が重要である。</li> <li>・病虫害抵抗性付与のためにDNAマーカー利用選抜を積極的に導入しており、育種手法の開発の面でも進展がみられる。</li> <li>・有望な育成系統もいくつかあり、今後、病害抵抗性・耐冷性を着実に向上させた実用品種の継続的な育成が期待できる。</li> </ul>
寒地中南部向け、大粒・高品質、わい化病抵抗性、機械化適性、多収の大豆品種の育成	(地独)道総研中央農業試験場	A	A	A	A	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ダイズシストセンチュウ抵抗性とわい化病抵抗性を併せ持つ系統の育成は評価できる。当該特性を持つ普通大粒品種の育成を加速すべきである。</li> <li>・病虫害抵抗性付与のためにDNAマーカー利用選抜を積極的に導入しており、育種手法の開発の面でも進展がみられる。</li> <li>・転換畑向けの耐湿性と茎疫病抵抗性の検定により形質評価がされ、湿害に強い系統育成が行われていることは、生産者からの要請もあり、今後の発展が期待される。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒冷地南部及び温暖地北部向け、高品質、病虫害複合抵抗性の大豆品種の育成	長野県野菜花き試験場	A	A	A	A	A	B	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加工適性が高くかつ耐倒伏性の「タチホマレ」、納豆加工適性に優れる「すずろまん」など優良品種を育成し、その普及に努めている点は評価できる。</li> <li>・今後、シストセンチュウおよび立枯性病害に対する抵抗性の向上を期待する。</li> </ul>
寒地・寒冷地向け、高品質、耐冷性、病害抵抗性、機械化適性のあずき品種の育成	(地独)道総研十勝農業試験場	A	A	A	A	A	B	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加工適性が高くかつ落葉病と茎疫病の複数のレースに抵抗性を持つ品種、系統を育成した点は評価できる。</li> <li>・今後、生産上の重要な土壌病害抵抗性とウイルス病抵抗性を一層強化した系統の育成や汎用コンバインによる収穫可能な品種の早期の育成を期待する。</li> </ul>
温暖地・暖地向け、高品質、良食味のらっかせい品種の育成	千葉県農業総合研究センター	B	B	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大英の新品種「おおまさり」を育成し、食味と外観品質に優れた普通粒大の系統をいくつか育成したことは評価できる。</li> <li>・オレイン酸含有率の向上や遺伝資源の分類にDNAマーカーを応用した点も育種手法の改良の点から評価できる。</li> <li>・今後、生産上で必要な作業性、栽培特性に優れた品種の開発に期待する。</li> <li>・耐病性の向上を図るため、育種戦略と育種手法の見直しが必要である。</li> </ul>
南西諸島南部向け、早期高糖性、耐干性、病虫害複合抵抗性、機械化適性、多収のさとうきび品種の育成	沖縄県農業研究センター	A	A	A	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な環境に適応し、耐干性や早期高糖性を改良した品種、系統をいくつか育成、普及している点は評価できる。</li> <li>・育種方法の面では、出穂時期の調整技術や遺伝資源の拡大の点で着実な進展がみられ、今後の育種効率に寄与する基盤が構築された。</li> <li>・島嶼に重要な耐干性、耐風性に対する取り組みの一層の強化を望む。</li> </ul>
病害抵抗性、高品質、早期肥大性、機械化適性のこんにゃく品種の育成	群馬県農業技術センターこんにゃく特産研究センター	A	B	B	B	C	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当該期間に新品種は育成されなかったが、すでに育成した品種の普及に努めており、また、将来の有望系統も保有しているため、今後の成果が期待できる。</li> <li>・育種に長期間を要するとはいえ、特に耐病性に重点を置いた育種の戦略と手法の根本的な見直しが必要と思われる。</li> <li>・DNAマーカーによる品種識別法の開発は評価できる。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
暖地・温暖地向け、高品質、病害抵抗性、機械化適応性のいぐさ品種の育成	熊本県農業研究センターい業研究所	A	A	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きわめて品質の高い「ひのはるか」を育成し、普及しつつある点は高く評価できる。</li> <li>・生産者の作業性の向上と実需者に受け入れられる一層の高品質化をねらいとした育種を進めてほしい。</li> <li>・多発傾向にあるという株枯れ症状の原因究明と育種による対策の取り組みが必要である。</li> </ul>
温暖地・中部高冷地向け、高品質、安定多収、機械化適性のそば品種の育成	長野県野菜花き試験場	A	B	C	C	C	C	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耐倒伏性の「タチアカネ」を育成した点は評価するが、当初の育種目標である収量性、品質、耐病性、耐湿性、機械化適性などの諸形質はそれほど向上していない。</li> <li>・育種上の重要特性としている耐湿性に対する取り組みが遅れている。</li> <li>・耐湿性の検定評価法の安定性および耐湿性の遺伝資源の探索と利用の可能性を明らかにしてほしい。</li> <li>・2組織が共同研究体制をとって取り組んでいる育種の今後の成果に期待する。</li> </ul>



課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
高ワイン品質、耐裂果性、病害抵抗性、醸造用のぶどう品種の育成	山梨県果樹試験場	A	B	B	A	A	A	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新品種の登録や優良系統の育成等の研究目標は達成している。</li> <li>・中間評価で指摘されたワインメーカーや栽培農家との協力体制については、改善効果が見られるが、登録品種の普及には関係業者・栽培農家等への一層の普及活動が必要である。</li> <li>・日本人向けワイン用ブドウなど、従来の育種目標とは異なるニーズをキャッチして一層の高品質化や農商工連携の取組等による普及拡大を期待する。</li> </ul>
大粒・高品質、良食味、病害抵抗性(うどんこ病、灰色かび病等)、巨峰より早熟、施設栽培用のぶどう品種の育成	福岡県農業総合試験場	B	B	B	A	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「秋鈴」や優良系統を育成したことは評価できる。</li> <li>・中間評価で指摘された、成果と育種目標との整合性については、有望早生系統の選抜が行われており、改善効果が見られる。</li> <li>・今後は、生産者はもちろんのこと、実需者(メーカー)と共同した育種の展開を期待する。</li> </ul>
高品質、高日持ち性、自家和合性等結実安定性、病害等抵抗性、生食用のおうとう品種の育成	山形県農業総合研究センター園芸試験場	A	A	A	A	A	A	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明確な育種目標に従い、研究計画どおり多様な品種登録、有望系統の育成が行われ、十分に目標を達成した。</li> <li>・特に、自家和合性品種の育成は経済的にも大きな価値を持つ成果である。また、高いアントシアニンを持つ系統も興味深い。</li> <li>・育種を継続し、日持ち性の科学的基盤づくりを望む。</li> </ul>
大果・高品質・良食味、早熟、高日持ち性、病害抵抗性、機能性成分高含有のびわ品種の育成	長崎県農林技術開発センター果樹研究部門	B	B	B	A	A	A	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「なつたより」の育成と普及が急速に進んでいることは評価できる。全国他産地への普及が望まれる。</li> <li>・消費動向に見合う品種育成の継続が不可欠である。</li> <li>・日持ち性の要因を生理学、あるいは遺伝学的に解明していく基礎研究への挑戦も期待する。</li> <li>・外来の遺伝資源の導入などにより、既存品種とは明確に異なる品種育成の検討も望む。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
高品質・良食味、高日持ち性、栽培容易性、病害抵抗性、多収、生食用のピナップル品種の育成	沖縄県農業研究センター名護支場	A	B	B	A	A	B	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・輸入産物に対抗して、生産を確保するための品種育成は不可欠で、「ジュリオスター」や「ゴールドパレル」の育成は評価できる。</li> <li>・「ゴールドパレル」が、高価格でインターネット販売されるなど、育成品種の普及、活用の成果が見られる。</li> <li>・今後の品種開発にあたっては、生産者だけでなく、料理人などを含む消費者の声を聞くような工夫や他機関との連携による普及活動も必要である。</li> </ul>
暖地向き、病害抵抗性、良質のうめ品種の育成	和歌山県農林水産総合技術センター果樹試験場うめ研究所	B	B	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目標への努力は評価できるが、資料を見る限りでは多くの遺伝資源を最大限利用しているようには思えない。乾燥ストレスについても具体的にどのような環境を想定しているのかが曖昧である。</li> <li>・耐性個体の選抜は行われており、選抜個体の実地試験を通しての実用化に期待する。</li> <li>・一般的に梅酒用あるいは梅干用、またその両方に適したとされるがより特化した形質をもつ品種の開発も期待したい。</li> <li>・ウメの栽培地域は広範囲であり、社会的ニーズ分析等を踏まえて、今後の研究目的を設定する必要がある。</li> </ul>
新規高品質、病害抵抗性、多収のチューリップ品種の育成	富山県農林水産総合技術センター園芸研究所	A	A	A	A	A	A	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多収性系統・早期促成適応系統の育成および交雑不親和性は今後の育種に大きな貢献をするものと期待できる。</li> <li>・豊富な遺伝資源の保存も含めて、関係機関と連携し、試験の継続が望まれる。</li> <li>・抵抗性DNAマーカーの開発は多様な方法があるので、花き研などと相談して開発を進めていただきたい。特に球根腐敗病抵抗性はQTLと考えられるが、遺伝子解析などを進める勢力が少ない状況での効率的なマーカー選抜法の確立は緊急の課題である。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
温暖地北部・山間冷涼地向 け、耐寒性の茶品種の育 成	埼玉県農林総合 研究センター茶業 研究所	A	B	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耐寒性極強品種育成の基盤整備にも着手しており、関東のみならず東北地域での普及が期待できる点は評価できる。</li> <li>・耐病性系統の育成に、より一層の努力と関東以北における茶産地形成と耐寒性茶育種との関係を明確する必要がある。</li> <li>・普及拡大への取り組みも事業評価として評価できる。</li> <li>・宮崎県、静岡県なども含んだ情報交換、系統の計画的交換など野茶研を含んだ「チーム茶育種」による地域での茶育種の継続を期待する。</li> </ul>
暖地向け、耐寒性(裂傷型 凍害)、病虫害抵抗性の茶 品種および釜炒り茶用品種 の育成	宮崎県総合農業 試験場 茶業支場	A	A	A	A	A	A	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・品種構成を変えうる系統シリーズの育成は高く評価できる。</li> <li>・指定試験で育成した新品種導入により、「やぶきた」一辺倒の品種構成を変えてきた功績は大きい。これは、指定試験が県や生産者と協力連携体制を構築してきた成果である。</li> <li>・宮崎県にも静岡県や埼玉県などとの情報交換、系統の計画的交換など野茶研を含んだ「チーム茶育種」による地域での茶育種の継続を期待する。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒地・寒冷地向け、安定多収のチモシー品種の育成	(地独)道総研北見農業試験場	A	B	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育成された品種を早く普及に供するために、その採種体制を整える必要がある。</li> <li>・放牧用の品種開発については困難が予想されるため、育種法の妥当性の検証を含めた取組を望む。</li> </ul>
温暖地向け、耐寒性、耐暑性、安定多収のイタリアンライグラス品種の育成	茨城県畜産センター	B	B	B	B	B	C	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多様な利用形態(短期、長期、極長期利用)に対応する品種、系統が育成されつつあることは評価できる。</li> <li>・「アキアオバ3」の速やかな普及の努力に期待する。</li> <li>・短期利用および長期利用系統については、育種法の妥当性の検証を含めた取組を望む。</li> </ul>
寒冷地・温暖地向け、病害抵抗性、安定多収のペレニアルライグス品種の育成	山梨県酪農試験場	B	B	B	A	A	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活発な試験研究が実施され、成果が発表されていることや放牧専用種「ヤツユメ」が育成されたことは評価できる。</li> <li>・選抜法の改善により、「ヤツユメ」「ハヶ岳T-26」より越夏性がさらに向上した系統を育成しているなど、今後の成果も期待できる。</li> </ul>
南西諸島・暖地向け、高品質、高採種性、安定多収のギニアグラス品種の育成	沖縄県畜産研究センター	B	C	B	B	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・南西諸島では永年利用、暖地では単年利用向けの高品質、高収量性の「うーまく」が育成され、小規模農家での普及が見込まれる。また、草資源のみならず、環境保全型農業用の緑肥作物や被覆作物としての利用も考えられる。</li> <li>・DNAマーカー選抜技術のさらなる精度向上に期待する。</li> </ul>
南西諸島・暖地向け、採草用、高品質、安定多収のローズグラス品種の育成	沖縄県畜産研究センター	B	C	C	C	B	C	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新品種の提案が望まれる。</li> <li>・人的、経済的資源が不足している。</li> <li>・DNAマーカー利用を系統解析にとどまらず、選抜にも活かせるよう完成度を高めて欲しい。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒冷地・温暖地東部向け、耐倒伏性、病害抵抗性、サイレージ用、多収のとうもろこし品種の育成	長野県花き試験場	B	B	B	B	C	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「タカネフドウ」を育成したことは評価できる。広く普及するように、種子の販売方法等も検討してほしい。</li> <li>・とうもろこしの栽培・生産を拡大するために、東北北部や中部高冷地および温暖地の二期作向け耐倒伏性、耐病性で多収の極早生品種の育成に期待する。</li> </ul>
寒冷地・温暖地東部向け、高品質、病害抵抗性、青刈・サイレージ用、安定多収のソルガム品種の育成	長野県畜産試験場	B	B	B	A	B	B	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サイレージ用、青刈用、ホールクロップサイレージ用の3つの利用形態に適応するそれぞれの優良品種の育成は予想以上の成果を挙げている。</li> <li>・ニホンジカ食害に対するソルガムの有効性、ソルガムサイレージを主原料とした「発酵TMR」の品質の安定性等を明らかにしたことも評価できる。</li> <li>・得られた成果をどのように普及させるかや飼料用作物としての利用以外の幅広い用途の開発も検討してほしい。</li> </ul>
暖地向け、極短期・短期利用、病害抵抗性、安定多収のイタリアンライグラス品種の育成	山口県農林総合技術センター	B	C	C	B	C	C	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究が中断したのは残念であるが、病害抵抗性、高消化性、高採種性、耐倒伏性などのユニークな研究を行っており、それらが、次の段階の育種に利用できるよう管理されることを期待する。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
寒冷寡照条件の草地酪農地帯における畜産物由来有機性資源の循環利用に伴う環境負荷物質の動態解明と環境負荷低減技術の開発	(地独)道総研根釧農業試験場	A	A	A	A	A	A	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存モデルを改良し、草地酪農の家畜排せつ物の循環利用と環境負荷の動態予測法を作り上げたことなど、本研究の目標はほぼ達成したと評価できる。</li> <li>DNDCモデルによる亜酸化窒素発生量予測の適合性向上について、今後さらに検討を加えることを期待する。</li> <li>研究成果が利用者に正しく理解されるような文言の表現や図表の作成に努めてほしい。</li> </ul>
閉鎖水系水田地帯における畜産由来有機性資源の循環利用に伴う環境負荷物質の動態解明と環境負荷低減技術の開発	秋田県農林水産技術センター農業試験場大湯農場	A	A	A	A	A	A	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>本研究の目標を達成するために多面的に研究を実施し、その成果に基づいて閉鎖水系水田地帯における「水質改善のための農法マニュアル」を作成したことは評価できる。</li> <li>研究成果のまとめ方が多岐にわたり、課題に対する焦点が多少ぼやけているため、一部を整理する必要がある。</li> <li>マニュアルを用いた負荷削減技術の普及には、未経験者への対応も重要である。</li> <li>未解決な課題については、さらに研究を進めることを期待する。</li> </ul>
赤黄色土露地野菜地帯における畜産由来有機性資源の循環利用に伴う環境負荷物質の動態解明と環境負荷低減技術の開発	愛知県農業総合試験場東三河農業研究所	A	A	A	A	A	A	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>家畜ふん堆肥連用条件における化学肥料の減肥が硝酸態窒素溶脱抑制効果と野菜収量に及ぼす効果を明らかにした上で、堆肥連用年数に対応した化学肥料の減肥量を提案するなど、膨大な研究成果が得られたことは評価できる。</li> <li>研究成果の普及にあたっては、マニュアル等の用語に注釈を付けるなど、利用者にわかりやすい形にすることや広域評価の対応も重要である。</li> <li>長期試験データを活用した研究面での発展を期待する。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
シラス台地上の畑作地帯における畜産由来有機性資源の循環利用に伴う環境負荷物質の動態解明と環境負荷低減技術の開発	鹿児島県農業開発総合センター 大隅支場	A	A	A	A	A	A	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水理地質構造の解析、地下水移動方向と地下水涵養量の解明、水質改善指針等の研究成果が得られたことは評価できる。</li> <li>・研究成果の普及にあたっては、マニュアル等の用語に注釈を付けるなど、利用者にわかりやすい形にすることや域内で耕畜連携への対応も重要である。</li> </ul>
砂地野菜畑における畜産由来有機性資源の循環利用に伴う環境負荷物質の動態解明と環境負荷低減技術の開発	静岡県農業試験場 海岸砂地分場	A	A	A	B	A	A	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本研究は、3年間で終了したため、未完成ではあるものの、いくつかの研究成果があがっている。</li> <li>・窒素動態の解明に基づく、機能炭を活用した施用基準の普及には、砂地以外の域外への広域評価も重要である。</li> <li>・残った課題に対応するためには、コーヒークラス炭化物の製造コストの低下と多様な利用法の開発が必須である。</li> </ul>

課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
アルファルファタコゾウムシの蔓延防止技術の開発	鹿児島県農業試験場大隅支場	A	A	A	A	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・耕種的防除法として、レンゲの遅播きにより、アルファルファタコゾウムシの被害を回避できることを明らかにしたことは高く評価できる。</li> <li>・発生予察、耕種的防除法、導入天敵の放飼とその保全策、IGR剤の散布などの様々な技術を合理的に組み合わせた、環境にやさしい総合防除法の構築は評価できる。</li> <li>・総合防除マニュアルを用いた広域的防除の推進には、地域にあったメニューへの加工、年次変動への対応も重要である。</li> <li>・このような成果をアピールし、よりインパクトを持たせるためには、学術論文の発表などをもっと活発に行う必要がある。</li> </ul>
ゾウムシ類・ミバエ類等南方系侵入特殊害虫の根絶技術の開発	沖縄県農業研究センター	A	A	A	A	A	A	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・古くからの侵入害虫であるアリモドキゾウムシとイモゾウムシの根絶、新たな侵入害虫であるナスミバエの根絶、ウリミバエとミカンコミバエの再侵入防止と多くの重要課題を同時並行的に解決しようとする努力が伺われ、多くの革新的な成果を挙げてきたことは高く評価できる。</li> <li>・研究成果を論文として多数公表していることも高く評価できる。</li> <li>・ナスミバエの沖縄本島侵入、ミカンコミバエやウリミバエの不断の再侵入など、地球温暖化状況で南方性害虫の侵入と分布拡大はますます日常化していくものと懸念される。</li> <li>・今後も予期せぬ害虫の大発生もあり得るので、継続的長期的研究が必要である。</li> <li>・台湾など、近隣諸国も含めたより広域的な防除の構築も将来的には考えていくべきである。</li> </ul>



課題名	研究機関	① 必要性	② 効率性		③ 有効性			総括 評価	評価コメント
			a	b	a	b	c		
交信攪乱技術等を活用したサトウキビの安定生産技術の開発	沖縄県農業研究センター	A	A	A	A	A	A	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交信攪乱法により鞘翅目害虫が防除できることを世界で初めて実証したことは、学術的にも応用的にも高く評価できる。</li> <li>・土壌病害の環境負荷の低い新規性フェロモンでの防除技術の確立と、現地での防除技術確立が生産者団体の協力も得てほぼ達成された。</li> <li>・沖縄本島や先島諸島のような昔からの分布地域では、根絶は許されず、フェロモン以外の他の防除法も取り入れたより総合的な防除法を構築していく必要がある。</li> <li>・ブアカカチャコガネの生活史の解明と交信攪乱剤の開発もきわめて興味深い。その有効性の検証は今後の研究に委ねざるを得ないが、この場合でも他のコガネムシ類も対象にした複合交信攪乱剤の開発と利用も視野に入れるべきである。</li> <li>・研究成果を多数の学術論文として公表しており、この点からも高く評価できる。</li> </ul>
難防除土壌伝染性ウイルスの耕種的・生物的制御技術の開発	富山県農業技術センター野菜花き試験場	A	A	A	A	B	B	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難防除土壌伝染性ウイルスの防除は困難な課題であるが、媒介菌も合わせて土壌から高感度に検出する技術およびウイルス汚染圃場診断法の開発について達成されたことは重要な成果である。</li> <li>・実際の防除に繋がる技術が少なく、防除土壌伝染性ウイルスの総合防除法を開発するためには、個別技術(弱毒ウイルスの利用、抵抗性品種の育成、ウイルス媒介菌の生物的防除法)について、今後さらなる研究が必要と判断される。</li> <li>・品種については今後、さらに新しい導入も予想されるので研究の継続とウェブサイトの定期的更新が望まれる。</li> </ul>

評価項目・評価基準

評価区分	評価項目		評価基準
事後評価	①必要性	a.成果の科学的、社会・経済的意義	A：高い、B：やや高い、C：やや低い、D：低いの4段階で評価を行う。
	②効率性	a.投入した研究資源の妥当性 b.研究計画・実施体制の妥当性	A：妥当、B：概ね妥当、C：見直しが必要、D：妥当でないの4段階で評価を行う。
	③有効性	a.研究目標の達成度 b.研究成果の実績・インパクト（論文、特許、普及に移しうる成果等の実績、知的財産権の活用実績、事業化・実用化の見通し等） c.研究の波及可能性	A：高い、B：やや高い、C：やや低い、D：低いの4段階で評価を行う。
	○総括評価	①～③の視点を踏まえた総合的評価	1 予想以上の成果をあげた。 2 当初の目的をほぼ達成した。 3 目的の達成は不十分であった